

「前書き（1）」

使徒 1：1～5

1. はじめに

(1) 新約聖書の約 25 パーセントがルカの著作である。

①ルカの福音書

②使徒の働き

(2) 使徒の働きの学びの冒頭で、3 つの重要な問いに答える。。

2. アウトライン

(1) ルカとは誰か。

(2) この書はいつ執筆されたのか。

(3) この書が書かれた目的は何か。

①歴史的目的

②神学的目的

③弁証論的目的

結論：

(1) この書の今日的意義は何か。

使徒の働きの全体像について学ぶ。

I. ルカとは誰か。

1. ルカの福音書と使徒の働きの執筆者である。

(1) ルカに関しては、ほとんど情報がない。

①彼が高等教育を受けていたことは、疑いようがない。

②彼は、医者であった。

*癒しの奇跡に関して、医学的見地から証言することができた。

③当時、有名な大学町が 3 つあったが、そのいずれかで医学を学んだのであろう。

*アテネ（ギリシア）

*アレキサンドリア（エジプト）

*タルソ（小アジアのキリキヤ、パウロの出身地）

2. ルカは異邦人なのかユダヤ人なのか。

(1) ルカは異邦人であるというのが通説である。

①その説は、コロ 4 : 14 を根拠としている。

Col 4:14 愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。

②コロ 4 : 10～11 で、パウロはユダヤ人信者たちの名前を列挙している。

③ルカの名は、その中にはなく、異邦人グループの中に出て来る。

(2) しかし、ルカはユダヤ人であるという説もある。

①イスラエルの地に住むユダヤ人ではなく、ディアスポラのユダヤ人である。

②つまり、ギリシア語を話すユダヤ人である（ヘレニスティック・ジュー）。

③見事なギリシア語の文章の背後に、エブライズムが存在している。

＊彼は、ヘブル語で考え、ギリシア語で文章を書いていたのかもしれない。

④ユダヤ教の神学や習慣に精通している。

＊ユダヤ教のセクト（教派）

＊神殿での祭儀

＊ユダヤの祭り

⑤エルサレムへの深い関心が見られる。

⑥ヘブル語聖書（旧約聖書）に精通している。

(3) 第 3 の可能性は、神を恐れる異邦人か、ユダヤ教への改宗者というものである。

①使徒の働きの中には、上記 2 者への言及が頻繁に出て来る。

(4) 個人的には、ルカはディアスポラのユダヤ人である可能性が高いと思う。

①ロマ 3 : 1～2 参照

II. この書はいつ執筆されたか。

1. 紀元 70 年以前に書かれた。

(1) エルサレムが崩壊したのは、紀元 70 年である。

①もしそれがすでに起こっていたとするなら、ルカがそれを省略するはずがない。

②この書の主要なテーマは、福音がユダヤ人から異邦人に伝えられたということであるので、エルサレムの崩壊は、ルカにとっては重要なテーマである。

2. 紀元 66～68 年以前に書かれた。

(1) 伝統的に、パウロは紀元 66 年～68 年ごろに死んだと言われている。

①もしパウロの死後に書かれたとしたら、ルカがそれを省略するはずがない。

3. 紀元 64 年以前に書かれた。

(1) ネロによるクリスチャンの迫害は、ローマの大火の直後から始まった。

①もしネロの迫害の迫害以降に書かれたとしたら、ローマの官憲によるキリスト教を合法と認める判決は、意味をなさなくなる。

4. 紀元 60～62 年頃に書かれた。

(1) パウロがローマで投獄されていたのは、紀元 60～62 年である。

①この時期に、この書は執筆されたと思われる。

(2) 使 28 : 30～31

Act 28:30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、

Act 28:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

①使徒の働き最後の聖句（2 節）は、紀元 60～62 年ごろの状況説明である。

②つまり、使徒の働きは完結したわけではなく、執筆の時点までの教会の歴史をまとめたものと言える。

③ルカの貢献によって、教会の最初の約 30 年間の歴史資料が手に入った。

Ⅲ. この書が書かれた目的は何か。

1. 歴史的目的（エルサレムからローマまでの教会の拡大）

(1) ルカの福音書の続編が、使徒の働きである。

①ルカの福音書は、イエスの地上におけるミニストリー（働き）の記録である。

②使徒の働きは、天に昇られた復活のイエスのミニストリーズの記録である。

*復活のイエスは、使徒たちを通し、また教会を通して御業を継続される。

*聖霊が使徒たちと教会を導く。

③「使徒の働き」や「使徒行伝」は、正確なタイトルではない。

*使徒たちの中で詳細に取り上げられているのは、ペテロとパウロだけ。

④「復活のイエスの働き」の方が、内容を言い当てている。

(2) ルカは、30 年間の教会の歴史を、地理的拡大に沿って記録している。

①エルサレムでの伝道（1 : 1～8 : 4）

②ユダヤとサマリヤでの伝道（8 : 5～12 : 25）

③地の果てへの伝道（13：1～28：31）

(3) ルカは、30 年間の教会の歴史を、前半（15 年）と後半（15 年）に分けている。

①前半は、ペテロが中心である（1：1～12：25）。

②後半は、パウロが中心である（13：1～28：31）。

③ペテロとパウロは、相似形で描かれている。

④これは、パウロの使徒職の弁証になっている。

(4) 使徒の働きは、福音書、書簡、黙示録を有機的につなげる連結器の役割を果たしている。

①使徒の働きがなければ、パウロ書簡の理解は正確性を欠いたことであろう。

2. 神学的目的

(1) キリスト教は旧約聖書から派生した正当な信仰であることを証明しようとした。

①神がイスラエルの民に約束されたことと、教会が受け取ったことの間には、継続性がある。

(2) 教会時代になっても、神がイスラエルの民に約束されることが破棄されたわけではない。

①今はイスラエルの民は神に敵対する者となっているが、やがて彼らは救われる。

②使 3：21

Act 3:21 このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。

(3) 注意点：使徒の働きは、歴史的記録である。

①そこから、普遍的な適用を導き出してはならない。

＊ペンテコステの体験

＊サウルのダマスコ途上の体験

＊使徒たちの裁定、奇跡、裁きなど

②普遍的適用を想定した唯一の神学的テーマは、「異邦人の救いの条件」である。

＊異邦人が救われるためには、ユダヤ教に改宗する必要があるのかどうか。

3. 弁証論的目的

(1) キリスト教がローマ帝国にとって危険な宗教ではないことを証明しようとした。

①イエス・キリストを信じる信仰は、ユダヤ人の指導者たちからの迫害に会った。

*ユダヤ人の指導者たちは、キリスト教を不吉で危険な宗教と断じた。

*この状況は、今も変わっていない。

②しかし、ローマの官憲はそうではなかった。

*キリスト教にユダヤ教と同じ特権（公認宗教）を与えた。

*実際のところ、彼らはほとんど無関心であった。

(2) ルカは、キリスト教は政治運動ではなく、宗教運動であることを示そうとした。

①キリスト教のルーツはユダヤ教である。

②それゆえ、キリスト教にユダヤ教と同じ特権（公認宗教）を与えるべきである。

(3) ルカは、使徒パウロが政治的に無害であることを示そうとした。

①パウロは、ローマの市民であり、謀反を煽動する者ではない。

結論：この書の今日的意義は何か。

1. エルサレムで誕生した教会が、どのようにして今日にまで至ったのかを知る。

2. 教会を取り巻く最初の 30 年間の状況を知る。

(1) 歴史的、社会的、文化的、政治的、宗教的状況

(2) 学んだことを今の時代に適用する。

3. 初期の信仰者たちの信仰と活動から、励ましを得る。

(1) 私たちを導いてくれた先輩たちへの感謝を覚えよう。

(2) その感謝は、初期の信仰者たちにまで至るはずである。

4. 使徒の働きは、普通の人たちの物語である。

(1) 使徒の働きは、未完の書である。

(2) 私たちは、今その書を書き継いでいる。

(3) 主役は、復活のイエスである。

(4) 復活のイエスは、聖霊によって、私たちを通して働きを継続しておられる。

(5) そのイエスは、やがて地上に戻ってこられる。

*復活のイエスの働きでないものは、排除しよう。

*復活のイエスの働きであるなら、そこに関わる人たちは同労者である。

「前書き（2）」

使徒 1 : 1～5

1. はじめに

- (1) 新約聖書の約 25 パーセントがルカの著作である。
 - ①ルカの福音書と使徒の働きは、前編と後編の関係にある。
- (2) この書が書かれた目的は何か。
 - ①歴史的目的
 - ②神学的目的
 - ③弁証論的目的

2. アウトライン

- (1) 献呈の辞（1～2 節）
- (2) 復活後のイエスの奉仕（3 節）
- (3) 使徒たちへの命令（4～5 節）

結論：弟子たちが変化した理由

- (1) イエスが復活したという確信
- (2) 神の国のプログラムの理解
- (3) 力の源の発見

使徒の働きの前書きについて学ぶ。

I. 献呈の辞（1～2 節）

1. 1 節

Act 1:1 テオピロよ。私は前の書で、イエスが行い始め、教え始められたすべてのことについて書き、

- (1) テオピロとは誰か。
 - ①ルカの福音書と使徒の働きは、ともにテオピロに献呈した形になっている。
 - *もちろん、多くの読者を想定して書いていることは言うまでもない。
 - ②ルカでは、「尊敬するテオピロ殿」となっている。
 - *「尊敬する（クラティストス）」は、ローマ高官のタイトルである。
 - *使 23 : 26、24 : 2、26 : 25 では「閣下」と訳されている。
 - ③テオピロには、「神を愛する人」と「神に愛されている人」の両方の意味がある。
 - ④このような書き出しは、紀元 1 世紀のローマ世界では一般的なものであった。

*ユダヤ人の歴史家ヨセフスもまた同じような書き方をしている。

⑤テオピロは、ルカの執筆活動を支援するパトロンであった可能性が高い。

⑥もしそうなら、テオピロはローマ人クリスチャンであったと思われる。

(2) 1～2節は、ルカの福音書の要約である。

①「**前の書**」というのは「ルカの福音書」のことである。

②ルカの福音書の目的は、イエスの生涯の出来事を時間順に並べて紹介すること。

*ルカ以外の3つの福音書は、時間の順にはこだわっていない。

③ルカの福音書は、イエスの行いと教えの最初から始まり、昇天で終わった。

(3) 「**イエスが行い始め、教え始められた**」

①「**始めた**」という言葉が2度出てくる。

②イエスの働きは2千年前に終わったのではなく、今も続いている。

③復活のイエスは、聖霊によって、地上の教会を通して、今も働いておられる。

④ルカは、その記録を正確に、時間順に記そうとした。

2. 2節

Act 1:2 お選びになった使徒たちに聖霊によって命じてから、天に上げられた日のことにまで及びました。

(1) 使徒の働きの中の主役は、3者である。

①復活し、昇天したイエス

②イエスの命令を実行する使徒たち

③イエスと使徒たちを結びつける聖霊

(2) 使徒たちは、イエスが「十字架の死とそれに続く復活」の計画について何度話しても、それが理解できなかった。

①霊の目を開き、聖書を理解させるのは、聖霊の働きである。

②弟子たちは、復活の主イエスから息を吹きかけられ、「聖霊を受けなさい」（ヨハ20:22）とのことばを受けた。

③そのとき彼らは、旧約聖書的な意味で聖霊を受けた。

*内住の聖霊ではなく、神のことばを理解させるための聖霊の力を受けた。

(2) ルカの福音書は、イエスの昇天の記事で終わっていた。

Luk 24:50 それから、イエスは、彼らをベタニヤまで連れて行き、手を上げて祝福された。

Luk 24:51 そして祝福しながら、彼らから離れて行かれた。

Luk 24:52 彼らは、非常な喜びを抱いてエルサレムに帰り、

Luk 24:53 いつも宮にいて神をほめたたえていた。

II. 復活後のイエスの奉仕（3 節）

1. 3 節

Act 1:3 イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現れて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。

(1) これは、復活後のイエスの働きの要約である。

①復活後のイエスの奉仕は、40 日間続いた。

*これは、ルカだけが記している情報である。

②聖書には、復活のイエスが現れたことが、10 回記録されている。

③この 40 日間は、福音書の時代から使徒の働きの時代への移行期間である。

(2) イエスは、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。

(3) 復活のイエスが弟子たちに教えたテーマは、「**神の国**」であった。

①ユダヤ人がイエスを拒否した時から、神の国のプログラムは新段階に入った。

*これは、メシア的王国（千年王国）が現れる前の状態である。

*これを「奥義としての王国」と呼ぶ。

*今がその時代である。

②マタ 13 章の多くのたとえ話は、そのことを教えるためのものであった。

*種蒔きのたとえ（4 種類の土地）

*良い麦と毒麦のたとえ

③復活のイエスは、マタ 13 章から教え始めたテーマを継続して教えた。

*神の国は、外面的には「キリストを告白するすべての人たち」を指す。

*神の国は、内面的には「真に救われている人たち」を指す。

III. 使徒たちへの命令（4～5 節）

1. 4 節

Act 1:4 彼らと一しょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。

(1) 4 節で、ルカの福音書と使徒の働きがつながる。

①「彼らといっしょにいるとき、」

＊ギリシア語の「スナリゾメノス」は、「塩をいっしょに食べた」という意味。

＊「彼らと食事を共にしていたとき、」（新共同訳）という訳も可能である。

②「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい」

＊神の国を拡大する働きに参加するためには、聖霊の助けが必要である。

＊聖霊の約束は、最後の晩餐の席ですでに教えられていた（43 日前）。

・ヨハ 14：16、26、15：26、16：7、13

③この約束は、五旬節の日（使 2 章）に聖霊降臨という形で成就する。

2. 5 節

Act 1:5 ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

(1) 聖霊降臨は、時代を画する出来事である。

①ヨハネのバプテスマと新時代のバプテスマが対比されている。

＊聖霊が、信者に「聖霊によるバプテスマ」を授ける時代になる。

＊「聖霊によるバプテスマを授けられるからです」（新改訳 2017）

②聖霊によるバプテスマによって、信者は教会の一員とされる。

③聖霊降臨以降、イエスをメシアとして信じる者は、信じた瞬間に聖霊によるバプテスマを授けられるようになった。

④1 コリ 12：13

1Co 12:13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。

(2) 火のバプテスマについて

①ルカ 3：16～17

Luk 3:16 そこでヨハネは皆に向かって言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。

Luk 3:17 また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃ききよめ、麦を集めて倉に納められます。そして、殻を消えない火で焼き尽くされます。」

①「火のバプテスマ」は、使徒の働き 1：5 には出て来ない。

②これは、裁きのバプテスマである。

＊将来起こる。

＊未信者だけに起こる。

結論：弟子たちが変化した理由

1. イエスが復活したという確信

(1) 使1：3の再確認

Act 1:3 イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。

(2) 弟子たちは、イエスが復活したことを圧倒的な証拠によって確認した。

①イエスは幻ではなく、栄光の体を持っておられる。

②復活のイエスは、食物を食べることができた（ルカ24：42～43）。

(3) 使4：19～20

Act 4:19 しかし、ペテロとヨハネは彼らに答えた。「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。

Act 4:20 私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」

(4) 弟子たちの証言が、イエスが死者の中から甦ったことを信じる根拠である。

2. 神の国のプログラムの理解

(1) 教会時代は、奥義としての王国の時代である。

①メシアの再臨後に登場するメシア的王国（千年王国）の前の時代である。

②今がその時代である。

③旧約聖書にある神の国に関する約束を、すべて教会が成就すると考えるのは、非現実的である。

④教会の使命は、携挙をもって終わる。

(2) 「種蒔きのたとえ」から学ぶ「奥義としての王国」の特徴

①同じ福音を伝える（同じ種が蒔かれる）。

②それを受け取る人には、4種類のパターンがある（4種類の土地）。

③私たちの使命は、失望せずに福音の種を蒔き続けることである。

(3) 「良い麦と毒麦のたとえ」から学ぶ「奥義としての王国」の特徴

①キリスト教界には、本物と偽物が併存する。

②本物の信者は、普遍的教会に属する。

3. 力の源の発見

(1) 復活のイエスは、聖霊により、教会を通して働いておられる。

(2) 聖霊のバプテスマは、求める必要のないものである。

①イエスを信じたときに、すでに授けられている。

(3) 私たちが求めるべきは、聖霊に満たされることである（聖霊の支配）。

①エペ 5 : 18

Eph 5:18 また、ぶどう酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。

「イエスの証人となる」

使徒1：6～8

1. はじめに

(1) この書が書かれた目的は何か。

- ①歴史的目的
- ②神学的目的
- ③弁証論的目的

(2) 前回の内容の確認

- ①献呈の辞（1～2節）
- ②復活後のイエスの奉仕（3節）
 - *「神の国」がテーマであった。
 - *これは、「奥義としての王国」である。
- ③使徒たちへの命令（4～5節）
 - *エルサレムを離れないで待て。
 - *父の約束（聖霊）

2. アウトライン

- (1) 使徒たちの質問（6節）
- (2) イエスの答え（7節）
- (2) イエスによる任命（8節）

結論：

- (1) 伝道の地理的拡大
- (2) 旧約聖書における証人という概念

イエスによる任命と、イエスの昇天について学ぶ。

I. 使徒たちの質問（6節）

1. 6節

Act 1:6 そこで、彼らは、いっしょに集まったとき、イエスにこう尋ねた。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。」

(1) この場面は、オリーブ山（ベタニヤに近い場所）での出来事であろう。

①6節と7節の内容の重要性に着目しよう。

*この質問に対するイエスの回答が、使徒の働きを理解する鍵となる。

- ②「そこで」(メン ウーン) (therefore) は、その前の節を受けた言葉である。
- ③イエスは、聖霊のバプテスマの約束をされた。
- ④そこで彼らは、「イスラエル復興」に関する質問をした。

(2) 「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか」

- ①日本語訳聖書では、「イスラエルのために国を再興してくださるのですか」となっている。
- ②「国」は「バシレイア」である。
- ③「restore the kingdom to Israel?」(ASV)
- ④この質問の内容は、ユダヤ的に読み解く必要がある。
- ⑤使徒たちの質問は、「メシア的王国」(千年王国)に関するものである。

(3) 使徒たちは、旧約聖書にある約束を知っていた。

①イザ 32 : 15～20

Isa 32:15 しかし、ついには、／上から霊が私たちに注がれ、／荒野が果樹園となり、／果樹園が森とみなされるようになる。

Isa 32:16 公正は荒野に宿り、義は果樹園に住む。

Isa 32:17 義は平和をつくり出し、／義はとこしえの平穏と信頼をもたらす。

Isa 32:18 わたしの民は、平和な住まい、／安全な家、安らかないこの場に住む。

Isa 32:19 ——雹が降ってあの森を倒し、／あの町は全く卑しめられる。——

Isa 32:20 ああ、幸いなことよ。／すべての水のほとりに種を蒔き、／牛とろばとを放し飼いするあなたがたは。

②ヨエ 2 : 28

Joe 2:28 その後、わたしは、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。／あなたがたの息子や娘は預言し、／年寄りも夢を見、若い男は幻を見る。

③その他の箇所(イザ 44 : 3～5、エゼ 39 : 28～29、ゼカ 12 : 10～13 : 1)

④これらの聖句が預言していること

- *終わりの時になると、イスラエルの民の上に聖霊が注がれる。
- *その結果、イスラエルは民族的救いを経験するようになる。
- *その救いが成就すると異邦人の時代は終わり、ダビデ王国が復興する。
- *これがメシア的王国(千年王国)である。
- *この王国は、地上に文字通り成就する王国である。
- *メシアはダビデの王座に着いてエルサレムから世界を統治する。
- *使徒たちは12の座に着いてイスラエル12部族をさばくようになる。

・マタ 19 : 28、ルカ 22 : 30にあるイエスの約束

(4) 使徒たちの質問は、必ずしも外的なものではない。

①聖霊の傾注とイスラエルの救いは、連動している。

②ただし、彼らにはメシア的王国が出現する時期に関する誤解があった。

Ⅱ. イエスの答え（7節）

1. 7節

Act 1:7 イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。」

(1) イエスは、メシア的王国の出現に関しては否定していない。

①つまり、ご自分が王として地上の王国を統治することは否定していない。

②ただし、それがいつ実現するのかを詮索することを戒めた。

(2) 「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです」

①「いつ」は、「クロノス」（時）である。

②「どんなとき」は、「カイロス」（時期）である。

③「どれくらい先か、どういう状況でそれが成就するか、知らなくてもよい」

④「いつとか、どんなときとか」は、ユダヤ的には再臨の前に起こる重要な出来事を指す。

(3) 「それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています」

①父なる神は、それを啓示しないことを選ばれた。

②それゆえ、父なる神以外には、受肉したイエスも天使も知らないことである。

(4)使徒たちは、イスラエルの救いはまだ先のことであることを理解するようになる。

①使 3 : 19～21

Act 3:19 だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。

Act 3:20 こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。

Act 3:21 このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。

②ロマ 11 : 25～27

Rom 11:25 兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、

あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、

Rom 11:26 こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。／「救う者がシオンから出て、／ヤコブから不敬虔を取り払う。

Rom 11:27 これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。／それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」

(5) 置換神学は間違っている。

①置換神学は、イスラエルに与えられていた約束は教会が継承したと教える。

②しかし、神がイスラエルに与えた約束は、終わりの日に必ず成就する。

＊ユダヤ人のすべてがメシアを拒否したわけではない。

＊もしそうなら、使徒の働きは存在しないことになる。

＊教会史の最初の約7年間は、異邦人信者がひとりも出て来ない。

＊使10章のコルネリオ

③置換神学は、教会が犯した最大の罪である。

＊反ユダヤ主義を生み出した。

＊終末論を混乱させた。

Ⅲ. イエスによる任命（8節）

Act 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

1. 8節

(1) 「しかし」（アッタ）（But）

①テーマを「イスラエルの将来の王国」から「今為すべき使命」に切り替える。

②イエスは、4～5節で語った「聖霊によるバプテスマ」を取り上げる。

③彼らは、聖霊によって力を受ける。

(2) 「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます」

①イエスは、どこで聖霊を受けるかを明確にしておられる。

＊エルサレムである。

②しかし、いつ聖霊を受けるかについては、あいまいである。

＊「もう間もなく」（使1：5）

③聖霊を受けるための準備に関しては、何も語られていない。

＊聖霊によるバプテスマは、神の一方的な恵みによって与えられる。

*人間の側の努力や行いによるのではない。

(3)「そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」

- ①使徒たちが「キリストの証人」となって活動することが本書のテーマである。
- ②「証人」（マルタス）（英語で martyr）
- ③この使命は、教会全体で行うべきものである。
- ④「聖霊の力」とは、その使命を果たすために必要かつ十分な力である。
- ⑤使1：8は、使徒の働きの区分にもなっている。

結論：

1. 伝道の地理的拡大

Act 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

(1) エルサレムでの伝道（2：1～8：4）

- ①エルサレムは、メシアが十字架に付いて死に、葬られ、復活し、昇天した町。
- ②ガリラヤ出身の弟子たちは、エルサレムを住まいとした。
- ③ここは、初代のユダヤ人信者たちの教会が誕生した町でもある。
- ④また、イエスを拒否した祭司や律法学者たちが権威をふるっていた町でもある。

(2) サマリヤでの伝道（8：5～25）

- ①サマリヤ人たちは、ユダヤ人の遠い親戚に当たる人々である。
*アッシリヤ捕囚以降、雑婚の民となった。
- ②独自の礼拝形式を持ち、ゲリジム山こそ神を礼拝する場所だと考えていた。

(3) ユダヤでの伝道（8：26～12：25）

- ①これは広義のユダヤで、ガリラヤも含む概念である。
- ②ガリラヤ地方は、当時のパリサイ主義の拠点となっていた場所である。
*エルサレムは、サドカイ派の勢力が強かった。

(4) 地の果て（13：1～20：38）

- ①「地の果て」とは、当時の用語で「異邦人の世界」を指す言葉である。
- ②初期のユダヤ人信者たちは、ディアスポラのユダヤ人を考えていたはずである。
- ③時の経過とともに、彼らは、福音はすべての民のものだということを理解した。

④21～28章までは、投獄されたパウロの活動を扱っている。

2. 旧約聖書における証人という概念

(1) イスラエルは、神の証人として召された。

①イザ 43：12

Isa 43:12 このわたしが、告げ、救い、聞かせたのだ。／あなたがたのうちに、異なる神はなかった。／だから、あなたがたはわたしの証人。／——【主】の御告げ——わたしは神だ。

*イスラエルは、共同体としての「神のしもべ」であり「神の証人」である。

②イザ 44：8

Isa 44:8 恐れるな、おののくな。／わたしが、もう古くからあなたに聞かせ、／告げてきたではないか。／あなたがたはわたしの証人。／わたしのほかに神があろうか。／ほかに岩はない。わたしは知らない。

*イスラエルは、偶像礼拝の民に対して唯一の神を証しする証人である。

(2) 教会は、共同体として、キリストの証人である。

①教会が証言すべき内容は、ルカ 24：46～48にある。

Luk 24:46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、

Luk 24:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。

Luk 24:48 あなたがたは、これらのことの証人です。

②教会に与えられている職務規程を再確認しよう。

*任命の内容は、「キリストの証人」となることである。

*任命の領域は、「地の果てまでも」である。

「イエスの昇天」

使徒 1：9～15a

1. はじめに

(1) 前回の内容の確認

- ①使徒たちの質問（6 節）
- ②イエスの答え（7 節）
- ③イエスによる任命（8 節）

Act 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

(2) アウトライン

- ①昇天（9～11 節）
- ②エルサレムへの帰還（12 節）
- ③一致した祈り（13～15 節 a）

結論：

- (1) エルサレムの重要性
- (2) キリスト教の比類なき特徴

イエスの昇天と弟子たちの従順について学ぶ。

I. 昇天（9～11 節）

1. 9 節

Act 1:9 こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。

(1) 「こう言ってから」

- ①復活したイエスは、40 日間にわたって弟子たちに現われた。
- ②最後は、オリーブ山の東山麓にあるベタニヤという村から昇天された。
- ③弟子たちには突然のことであったが、イエスにとってはそうではなかった。
- ④イエスは、地上でのすべての使命を終えて、天に昇られた。
- ⑤これ以降、イエスは使徒たちと教会を通して地上での働きを継続される。

(2) 「雲に包まれて、見えなくなられた」

- ①この雲は、栄光の雲（シャカイナ・グローリー）である。
- ②ルカ 24：50～51 に平行記事がある。

Luk 24:50 それから、イエスは、彼らをベタニヤまで連れて行き、手を上げて祝福された。

Luk 24:51 そして祝福しながら、彼らから離れて行かれた。

2. 10 節

Act 1:10 イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。

(1) 弟子たちは、すぐにイエスが戻って来られることを期待して天を見つめていた。

①そこにふたりの天使が現われ、重要なメッセージを伝えた。

②彼らは、白い衣を着た人として姿を現した。

3. 11 節

Act 1:11 そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

(1) 「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか」

①使徒たちは、イスカリオテのユダ以外は全員ガリラヤ出身であった。

②イエスはすぐには帰って来ないので、天を見上げていても無駄だという意味。

(2) 「このイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります」

①これは、イエスの再臨の預言である。

②同じお方が、同じ有様で（つまり、栄光の雲に包まれて）戻って来られる。

③ダニ 7 : 13～14

Dan 7:13 私がまた、夜の幻を見てみると、／見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、／年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。

Dan 7:14 この方に、主権と栄光と国が与えられ、／諸民、諸国、諸言語の者たちがことごとく、／彼に仕えることになった。／その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、／その国は滅びることがない。

④マタ 24 : 30

Mat 24:30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。

⑤黙 1 : 7

Rev 1:7 見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。

Ⅱ. エルサレムへの帰還（12 節）

1. 12 節

Act 1:12 そこで、彼らはオリーブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムの近くにあつて、安息日の道のりほどの距離であつた。

(1) オリーブ山からエルサレムへの帰還

①「安息日の道のりほどの距離」、「安息日に歩くことが許される道のり」(新 2017)

③ヨシ 3 : 4 (宿営地と契約の箱の距離は、約 2000 キュビト)

Jos 3:4 あなたがたと箱との間には、約二千キュビトの距離をおかなければならない。それに近づいてはならない。それは、あなたがたの行くべき道を知るためである。あなたがたは、今までこの道を通つたことがないからだ。」

④約 900 メートル弱。つまり、短い距離を移動したということ。

(2) 彼らは、忠実にエルサレムに留まろうとしている。

①そこは、弟子たちにとっては危険な町であつたが、そこに戻って行つた。

②弟子たちの信仰の成長が見られる。

Ⅲ. 一致した祈り（13～15 節 a）

1. 13 節

Act 1:13 彼らは町に入ると、泊まっている屋上の間に上がつた。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであつた。

(1) 彼らが集つた場所は、「屋上の間」であつた。

①最後の晩餐の部屋。伝承ではヨハネ・マルコの母の家だつたとされている。

②復活のイエスは、この部屋に 2 度姿を現した（ヨハ 20 : 19、26）。

③この部屋は、イエスの復活と昇天後、信者たちの本部になっていた。

(2) 12 使徒がリストアップされている。

①このリストは、ルカ 6 : 14～16 のリストと同じである。

②ただし、イスカリオテのユダが欠落している。

2. 14～15 節 a

Act 1:14 この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。

Act 1:15a そのころ、百二十名ほどの兄弟たちが集まっていたが、

(1) 「120 名ほどの兄弟たちが集まっていたが」

- ①この人数は、当時の二階部屋の収容能力を越えていた。
- ②この人数は信者の総数ではない。信者の総数は、500 人以上になる。
- ③500 人以上の信者が、イエスの復活を目撃している（1 コリ 15：5～7）。
- ④つまり、380 人以上が、その場にいなかったことになる。
- ⑤この部屋にいた信者の多くが、巡礼祭のためにエルサレムに上ってきていた。
- ⑥他の信者たちは、ガリラヤやその他の場所にいたのであろう。

＊資金力の不足か、恐れか。

(2) 「イエスの母マリヤ」

- ①新約聖書でイエスの母マリアの名が出て来るのは、これが最後である。
 - ②信者たちは、マリアに向かってではなく、マリアとともに祈っていたのである。
- ＊マリアは、「**イエスの母**」であって、「**神の母**」ではない。
- ③彼女の使命は終わり、これ以降特筆すべき働きをすることはなかった。

(3) 「イエスの兄弟たち」

- ①かつてイエスを信じようとしなかったイエスの 4 人の弟たちも、そこにいた。
 - ②ヤコブは、復活のイエスに出会っている（1 コリ 15：7）。
- ＊後に彼は、エルサレム教会の指導者（監督）となる。
- ＊ヤコブの手紙の著者である。
- ③他の弟たちも、イエスの復活を目撃したと思われる。
 - ④彼らは、マリアの息子たちである。
- ＊マリアは、「永遠の乙女」ではない。

(4) 「婦人たち」

- ①紀元 1 世紀の文書に、婦人たちへの言及があるのは珍しいことである。
 - ②男女が同じ部屋で祈っていた。
- ＊後代になると、会堂では男女の席が分離されるようになる。
- ③考えられる婦人たち

＊**マグダラのマリヤ（イエスの復活の目撃者。ヨハ 20：18）**

＊**ヤコブの母マリアとサロメ（イエスの復活の目撃者。マコ 16：1）**

＊**ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ（ルカ 8：3）**

＊**スザンナ（ルカ 8：3）**

＊**マルタとマリア（ヨハ 12：2～3）**

*イエスの母の姉妹マリア（ヨハ 19：25）

*使徒たちの妻たち

④ルカは、婦人たちの貢献と奉仕を正當に評価している。

(5) 「みな心を合わせ、祈りに専念していた」

①彼らの心には、父の約束（聖霊）に対する期待感が満ちていた。

②一致した祈り、継続した祈りを引き出す力は、神の約束に対する期待感である。

③祈りによって神を動かそうとすると、苦しくなる。

④みことばの中に約束を発見し、その約束に対する期待感をもって祈るなら、それは力ある祈りとなる。

結論：

1. エルサレムの重要性

(1) 旧約聖書に 670 回出て来る。

(2) アブラハムの時代には、サレムと呼ばれていた（創 14：18）。

(3) アブラハムはここで、イサクを捧げた（モリヤの山。創 22 章）。

(4) ダビデは、エブス人を征服し、ここを首都とした。

①エルサレムは、「ダビデの町」と呼ばれるようになった。

②ユダヤ人の霊的、精神的、文化的、政治的、経済的、軍事的中心となった。

(5) ダビデはここに契約の箱を運び入れた（2 サム 6：12）。

(6) ソロモンは、ここに神殿を建設した。

(7) ユダヤ人たちは、エルサレムを世界の「ヘソ」と考えてきた。

①エゼ 5：5

Eze 5:5 神である主はこう仰せられる。「これがエルサレムだ。わたしはこれを諸国の民の真ん中に置き、その回りを国々で取り囲ませた。

(8) 町と神殿は、前 586 年にバビロン軍によって破壊された。

(9) バビロンから帰還後（前 6 世紀の終わり）、第 2 神殿が建設された。

①粗末な建物であった。

(10) それから約 500 年後に、ヘロデ大王が第 2 神殿を拡張した。

①エルサレムは、ローマ世界屈指の町として建て上げられた。

(11) エルサレムは、イエスに敵対する町となった。

①イエスは、この町で死に、復活し、昇天された。

(12) 使徒たちは、ペンテコステ以降、ここを伝道の拠点とするようになる。

(13) イエスは、この町に戻ってこられる。

(14) エルサレムは、千年王国の都となる。

(15) 異邦人は、礼拝のためのエルサレムに上ってくるようになる。

①ミカ4:1~2

Mic 4:1 終わりの日に、／【主】の家の山は、山々の頂に堅く立ち、／丘々よりもそびえ立ち、／国々の民はそこに流れて来る。

Mic 4:2 多くの異邦の民が来て言う。／「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家に上ろう。／主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。／私たちはその小道を歩もう。」／それは、シオンからみおしえが出、／エルサレムから【主】のことばが出るからだ。

②イザ2:2~4

2. キリスト教の比類なき特徴

(1) 十字架の死と埋葬

①人となられた神の子が、罪人の罪を贖うために呪われた死を遂げられた。

(2) 死者の中からの復活

①贖いの死が有効であることが証明された。

②死後のいのちが保証された。

(3) 昇天

①信じる者の救いの完成が保証された。

②復活したイエスは、父なる神の右に座し、信者の救いを完成へと導かれる。

③使2:33

Act 2:33 ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。

④へブ1:3

Heb 1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の全能者の右の座に着かれました。

⑤へブ8:1~2

Heb 8:1 以上述べたことの要点はこうです。すなわち、私たちの大祭司は天におられる全能者の御座の右に着座された方であり、

Heb 8:2 人間が設けたのではなくて、主が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられる方です。

⑥へブ12:2

Heb 12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はばかりしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

(4) 再臨

①信者に与えられている究極的な希望である。

「使徒の補充」

使徒1：15～26

1. はじめに

(1) 前回の内容の確認

- ①昇天（9～11節）
- ②エルサレムへの帰還（12節）
- ③一致した祈り（13～14節）

(2) アウトライン

- ①指導者ペテロ（15節b）
- ②ユダの運命（16～19節）
- ③ペテロの提言（20～22節）
- ④12番目の使徒（23～26節）

結論：使徒について

使徒の補充について学ぶ。

I. 指導者ペテロ（15節）

1. 15節

Act 1:15 そのころ、百二十名ほどの兄弟たちが集まっていたが、ペテロはその中に立ってこう言った。

(1) ペテロは、120名ほどの信者の群れのリーダーとして行動している。

- ①昇天から聖霊降臨までの10日間、彼らは熱心に祈っていた。
- ②使徒の働きの前半は、ペテロを中心に物語が展開する（1～15章）。

(2) それゆえ、ペテロの経歴の再確認が重要になる。

- ①ヘブル名はシメオン。

Act 15:14 神が初めに、どのように異邦人を顧みて、その中から御名をもって呼ばれる民をお召しになったかは、シメオンが説明したとおりです。

- ②イエスが与えたニックネームは、ギリシア語でPetros、アラム語でKepha。

Joh 1:42 彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。

「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ(訳すとペテロ)と呼ぶことにします。」

- ③ペテロとアンデレは兄弟で、ベツサイダ出身の漁師であった。

*一番初期に召された弟子たちであった。

*元はバプテスマのヨハネの弟子であった。

④ペテロは結婚しており、カペナウムで大きな家に住んでいた。

*この家は、会堂に近かった。

*ペテロの姑は、イエスによって熱病が癒された。

⑤ペテロの名は、常に12使徒のリストの最初に出てくる。

*マタ10:2、マコ3:16、ルカ16:14、使1:13

⑥イエスに最も近かった3人の中に入っている（ペテロ、ヤコブ、ヨハネ）。

⑦イエスを3度拒否した（四福音書すべてにこの記録がある）。

⑧復活のイエスを見た最初の使徒である。

Luk 24:33 すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、

Luk 24:34 「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現された」と言っていた。

⑨復活のイエスは、ペテロを教会の羊飼いに任命された（ヨハ21:15～17）。

⑩彼には、「天の御国の鍵」（複数形）が与えられた。

Mat 16:19 わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」

*ユダヤ人の救い（2章）

*サマリヤ人の救い（8章）

*異邦人の救い（10章）

⑪ユダヤ的に言えば、彼はラビ長として奉仕をしたのである。

*律法に関わることについて判断を下した。

*罪を裁いた。

*彼の権威は、超自然的な力によって証明された。

・アナニヤとサッピラの死（使5:15）

⑫使15章以降、巡回伝道者として奉仕をしたと思われる。

Ⅱ. ユダの運命（16～19節）

1. 16～17節

Act 1:16 「兄弟たち。イエスを捕らえた者どもの手引きをしたユダについて、聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかったのです。

Act 1:17 ユダは私たちの仲間として数えられており、この務めを受けていました。

(1)「聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことば」

①ペテロは、聖書の靈感を信じていた。

＊二重著者（聖霊とダビデ）

②ユダの裏切りは、聖書預言の成就である。

＊詩篇から 2 箇所を引用した（詩 69：25、109：8）。

③「成就しなければならなかったのです」は、神の計画から見た必然性である。

④ユダは、使徒のひとりとして任命を受けていたが、イエスを裏切った。

(2) ルカは、ペテロの話をさえぎる形で挿入句を入れ、ユダの死について説明する。

2. 18 節

Act 1:18 （ところがこの男は、不正なことをして得た報酬で地所を手に入れたが、まさかさまに落ち、からだは真っ二つに裂け、はらわたが全部飛び出してしまった。

(1) ルカは、ユダが不正な報酬で地所を手に入れたと書いている。

①マタ 27：3～10 では、祭司長たちが地所を買ったことになっている。

②ユダヤ的に解釈するなら、これは矛盾ではない。

③献金が不正の富である場合、それは献金者に返還された。

④ユダの場合は、すでに自殺していたので、返還は不可能であった。

⑤それゆえ、祭司長たちはユダの名で地所を買い、公の用に供したのである。

(2) ルカは、「からだは真っ二つに裂け、はらわたが全部飛び出してしまった」と書いている。

①マタ 27：5

Mat 27:5 それで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして、外に出て行って、首をつった。

②ユダヤ的に解釈するなら、矛盾は解決する。

③死体は汚れと見なされ、城壁内に夜を越えて留まることは許されなかった。

④ユダの死体は、城壁からヒンノムの谷に投げ落とされた。

3. 19 節

Act 1:19 このことが、エルサレムの住民全部に知れて、その地所は彼らの国語でアケルダマ、すなわち『血の地所』と呼ばれるようになった。）

(1) この話は、エルサレム中で有名なものとなった。

①彼らは、その地所を「血の地所」と呼んだ。

②血塗られた金を使って、ユダの名で買われた地所である。

③アラム語で「アケルダマ」である。

(2) 挿入句はここで終わり、ペテロの話に戻る。

Ⅲ. ペテロの提言（20～22 節）

1. 20 節

Act 1:20 実は詩篇には、こう書いてあるのです。『彼の住まいは荒れ果てよ、そこには住む者がいなくなれ。』また、『その職は、ほかの人に取りらせよ。』

(1) 詩 69 : 25 と詩 109 : 8 を引用した。

①詩篇の中には、悪人に神の裁きが下るように祈り求める詩篇がある。

*これは、「復讐」ではなく、「神の義」が守られることを願うものである。

②ペテロが引用したのは、ともにこの範疇に入る詩篇である。

(2) ダビデは、具体的にユダについて預言したわけではない。

①引用した 2 つの聖句は、王に対する反逆者が裁かれるようにという祈りである。

②王はメシアの予型である。

③イエスを裏切ったユダは、旧約聖書における「王に対する反逆者」と同じ。

④「王に対する反逆者」が裁きを受けたとするなら、イエスを裏切ったユダが裁きを免れるはずがない。

*これは、「大から小への議論」（カル・バホメル）である。

2. 21～22 節

Act 1:21 ですから、主イエスが私たちとひとりに生活された間、

Act 1:22 すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。」

(1) 使徒となる資格

①イエスの公生涯の期間、共に行動した者であること。

*バプテスマのヨハネの活動から、イエスの昇天に至るまでの間のこと。

②イエスの復活の目撃者であること。

*使徒の使命は、イエスの復活の証人となること。

*福音の中心は、イエスの復活にある。

*彼らの証言によって、多くの人たちがイエスを救い主と信じるようになる。

(2) この条件に合う者は、120 人の中で 2 人しかいなかった。

- ①どちらが神から選ばれているかは、神に訊ねるしかない。

IV. 12番目の使徒（23～26節）

1. 23節

Act 1:23 そこで、彼らは、バルサバと呼ばれ別名をユストというヨセフと、マッテヤとのふたりを立てた。

(1) 「バルサバと呼ばれ別名をユストというヨセフ」

①ヨセフ

②2つのニックネームがあった。

＊ヘブル名は、バルサバ（安息日の息子）。安息日に誕生したか。

＊ローマ名は、ユスト。

(2) マッテヤ

①ここ以外に情報がない。

②伝承では、エチオピアで伝道し、殉教の死を遂げたとされている。

2. 24～25節

Act 1:24 そして、こう祈った。「すべての人の心を知っておられる主よ。

Act 1:25 この務めと使徒職の地位を継がせるために、このふたりのうちのどちらをお選びになるか、お示してください。ユダは自分のところへ行くために脱落して行きましたから。」

(1) 祈りの根拠

①使徒の条件に合う人物が2人いたが、どちらを選ぶべきか分からない。

②しかし、神はすでに選んでおられる。

③祈りの内容は、神の選びが明らかにされることである。

④人間が選ぶわけではない。

3. 26節

Act 1:26 そしてふたりのためにくじを引くと、くじはマッテヤに当たったので、彼は十一人の使徒たちに加えられた。

(1) 彼らが採用した方法は、「くじ」である。

①この方法は旧約的なもので、決して間違ったものではない。

＊レビ 16 : 8、ヨシ 14 : 2、ネヘ 10 : 34、11 : 1、箴 16 : 33

②両者の名前を記した石を堅い器の中で振り、最初に飛び出た石が当たりである。

＊ひとつを取り出した可能性もある。

- ③くじは、マッテヤに当たった。
- ④聖霊降臨以降は、くじを引く必要はなくなった。

(2) これ以降、マッテヤの名は一度も出て来ない。

- ①しかし、12 使徒という言葉が出て来る。
- ②彼は、12 使徒のひとりとして、忠実に奉仕をしたのである。

＊使 2 : 14、6 : 2

(3) マッテヤの選びの正当性

- ①マッテヤの選びを疑問視する人がいる。
- ②しかし、聖書にはこの方法を非難するような箇所は見当らない。
- ③パウロは、公生涯の期間イエスと生活をともにしていない。
- ④使 6 : 2 には、「そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った」とあるので、マッテヤを含めた 12 人が権威をもって奉仕をしていたことが分かる。

結論：使徒について

1. 使徒は、ギリシア語で「apostolos」である。

(1) 使徒の働きの中で 30 回以上出て来る。

- ①任命を受けた者、遣わされた者

(2) 任命するのは、キリストである。

- ①キリストの権威を委譲され、キリストの代理人として派遣された者

2. 使徒の 2 区分

(1) 第一義的な使徒たち。12 使徒に限定される。

- ①イエスによって個人的に選ばれた。
- ②イエスの公生涯と復活の証人となる。
- ③教会の土台としてリーダーシップを発揮する（エペ 2 : 20）。

Eph 2:20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

- ④メシア的王国においては、12 の部族を裁く（マタ 19 : 28）。

Mat 19:28 そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。

- ⑤使徒の補充が重要である理由は、ここにある。

*ユダは、現在の使命も、将来の使命も、放棄したのである。

⑥使徒の継承という概念も、回復という概念も、聖書にはない。

*ヤコブが死んでも（使 12：2）、使徒職の補充はなかった。

（2）第二義的な使徒たち

①イエスの復活を目撃した人たち（1 コリ 9：1）

1Co 9:1 私には自由がないのでしょうか。私は使徒ではないのでしょうか。私は私たちの主イエスを見たのではないのでしょうか。あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。

②イエスの弟のヤコブ、バルナバ、そしてパウロ

③パウロは、自分が最後だと認識している（1 コリ 15：8～9）。

1Co 15:8 そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現れてくださいました。

1Co 15:9 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。

3. 使徒たちは全員ユダヤ人である。

（1）異邦人クリスチャンは、このことを忘れている。

（2）使徒は、教会に与えられた聖霊の賜物のひとつである。

①1 コリ 12：28

1Co 12:28 そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行う者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者などです。

②エペ 4：11

Eph 4:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。

「聖霊降臨」

使徒 2：1～4

1. はじめに

(1) 前回の内容の確認

- ①指導者ペテロ（15 節 b）
- ②ユダの運命（16～19 節）
- ③ペテロの提言（20～22 節）
- ④12 番目の使徒（23～26 節）

(2) アウトライン

- ①When（いつ）
- ②Where（どこで）
- ③Who（誰が）
- ④What（何を）

結論： 聖霊によるバプテスマについて

- (1) 意味
- (2) 回数
- (3) 目的

聖霊降臨について学ぶ

I. When（いつ）

1. 「五旬節の日」

Act 2:1 五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。

(1) ヘブル語で「シャブオット」、ギリシア語で「ペンテコステ」という。

①初穂の祭りから数えて 50 日目の祭り

＊「シャブオット」は「七週の祭り」と訳される。

＊「ペンテコステ」は「50」という数字。「五旬節の祭り」と訳される。

②初穂の祭りの日に、イエスは復活された。

③それから 40 日間断続的に弟子たちに現れ、最後は昇天された。

④昇天から 10 日目にこの祭りが来る。

⑤初穂の祭りと五旬節の祭りは、日曜日にやって来る。

(2) 五旬節の祭りは、3 つの巡礼祭のひとつである。

*ユダヤ人の成人男子は、エルサレムの神殿で【主】を礼拝するように命じられた。

①過越の祭り

*出エジプトの出来事を記念する祭りである。

*メシアの死を予表する祭りである。

②五旬節の祭り

*シナイ山でのモーセの律法の付与を記念する祭りである。

*聖霊降臨を予表する祭りである。

③仮庵の祭り

*荒野の放浪を記念する祭りである。

*メシア的王国（千年王国）を予表する祭りである。

2. 「なって」

(1) 訳文の比較

「五旬節の日になって、」（新改訳）

「五旬祭の日が来て、」（新共同訳）

「さて、ペンテコステの日が満ちた時、」（回復訳）

「And when the day of Pentecost was fully come,」（KJV）

「And when the day of Shavuot is fulfilled,」（OJB）

(2) ギリシア語の動詞は、「スンプレイロオウ」（sumpleroo）である。

①ルカは、この年の五旬節の祭りがこの祭りの預言的意味を成就したと冒頭で宣言する。その内容が、使2章の記録である。

③出19～20章でシナイ契約が結ばれ、石の板に書かれた律法が与えられた。

*モーセの律法

④使2章で聖霊が降臨し、心に書かれた律法が与えられた。

*キリストの律法

⑤シナイ山の出来事と、モリヤの山（エルサレム）の出来事の対比は重要である。

II. Where（どこで）

Act 2:2 **すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。**

1. 「彼らのいた家」とは、どこか。

(1) 1章の続きで、彼らは依然として屋上の間（二階部屋）にいたと考える人がいる。

- ①その場合、屋上の間から神殿域への移動をどうしたかという疑問が湧いてくる。
- ②ルカは、その点について何も記録していない。
- ③使 2：5 では、彼らは神殿域にいたことになっている。

(2) 彼らは、祭りを祝うためにすでに神殿域にいた。

- ①時間は、すでに午前 9 時になっている。
- ②「家」とは、神殿のことである。
- ③使 7：47 のステパノの説教では、「家」は神殿を意味する。

Act 7:47 けれども、神のために家を建てたのはソロモンでした。

2. 彼らは、神殿域のソロモンの回廊にいたのである。

- (1) 主イエスは、この場所を好んで用いられた。

Joh 10:23 時は冬であった。イエスは、宮の中で、ソロモンの廊を歩いておられた。

- (2) 使徒たちもソロモンの廊を好んだ。

Act 3:11 この人が、ペテロとヨハネにつきまとっている間に、非常に驚いた人々がみないつせいに、ソロモンの廊という回廊にいる彼らのところに、やって来た。

Act 5:12 また、使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議なわざが人々の間で行われた。みなは一つ心になってソロモンの廊にいた。

III. Who（誰が）

- 1. 他国のことばで話し出したのは、誰か。

Act 2:1 五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。

- (1) 伝統的な解釈は、信者 120 名全員である。

- ①「みなが一つ所に集まっていた」とある。
- ②この解釈も可能ではあるが、文脈上の問題点がある。

- (2) 訳文の比較

「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた」（新改訳）

「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、」（新共同訳）

「五旬節の日となり、彼らみな一處に集ひ居りしに、」（文語訳）

「And when the day of Pentecost was now come, they were all together in one place.」（ASV）

- ①「彼ら」とは、誰か。

②120 人全員なのか、12 使徒だけなのか。

2. ルカは、他国のことばで話したのは 12 使徒だけだと書いているように読める。

(1) ルカが書いた文章には、章や節の区切りはない。

①使 1:26 と使 2:1 は、繋がっている。

②「彼ら」の先行詞 (antecedent) は、12 使徒である。

(2) 他国のことばで話したのは、みなガリラヤの人であった。

Act 2:7 彼らは驚き怪しんで言った。「どうでしょう。いま話しているこの人たちは、みなガリラヤの人ではありませんか。」

IV. What (何を)

1. 2～3 節

Act 2:2 すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。

Act 2:3 また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。

(1) 「激しい風」

①風が吹いたのではなく、響きが起こったのである（肌ではなく耳で感じた）。

②風は、ヘブル語で「ルアハ」である。聖霊も同じ言葉である。

③風は、聖霊の象徴である。

④エゼ 37 章の枯れ骨の谷の箇所でも、風は聖霊の象徴である。

(2) 「炎のような分かれた舌」

①実際の炎ではなく、そのように見えたのである（肌ではなく目で感じた）。

②炎のような塊が分化し、舌の形を取って使徒たちひとりひとりの上に留まった。

③火も、聖霊の象徴である。

④聖霊がついに、劇的な方法で降臨されたのである。

*イエスの約束は、成就した。

(3) 出 19～20 章と使 2 章の対比

①両者の間には、約 1500 年の隔りがある。

Exo 19:18 シナイ山は全山が煙っていた。それは【主】が火の中であって、山の上に降りて来られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山が激しく震えた。

②両方の出来事には、ともにシャカイナグローリーが伴った。

- ③シナイ山に降りて来られた神は、今や信者の心に内住するようになられた。
- ④ルカも、使徒たちも、この点はよく理解していた。

2. 4 節

Act 2:4 **すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しました。**

(1)使徒たちには、他国のことばで話す能力が与えられた。

- ①「舌」は、「ことば」の象徴である。
- ②「ことば」はギリシア語で「グロッサ」である。「異言」とも訳される。
- ③このことばは、現実が存在する、文法的に理解可能なことばであった。
- ④これは、聖霊が使徒たちを通して語っているのではない。
- ⑤聖霊が、使徒たちに話す能力を与えているのである。
- ⑥この時点で、使徒たちはキリストの証人となるための力を受けた。

(2) この日、エルサレムにいた巡礼者たちは、教会の誕生を目撃した。

- ①これ以来、キリストを信じる者の内に、聖霊が内住されるようになった。
- ②また、キリストを信じた者はキリストの教会と一体化させられるようになった。

(3) ルカは、「聖霊の満たし」と「聖霊によるバプテスマ」をひとつにまとめて記録している。

- ①ルカは、「聖霊に満たされ」としか書いていないが、「聖霊によるバプテスマ」も同時進行で起こっている。
- ②このふたつの概念は、ともに聖霊の働きの個別の分野である。

(4) 「聖霊によるバプテスマ」

- ①「聖霊によるバプテスマ」とは、キリストと、またキリストの教会と一体化することである。
- ②これは、繰り返すことのない一度限りの出来事である。
- ③キリストを信じた瞬間、すべての信者は「聖霊によるバプテスマ」を体験する。

1Co 12:13 **なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。**

* 「一つの御霊を飲む者とされた」とは、聖霊の内住のことである。

(5) 「聖霊の満たし」

Eph 5:18 また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。

- ①「聖霊の満たし」とは、聖霊が信者の心を支配し、導くことである。
- ②その結果、伝道の力や聖化の力が与えられる。
- ③信者は、自分の努力で「聖霊の満たし」を作り出すことはできない。
- ④それは、聖書を学び、神の御心に従順になることによって得られる恵みである。
- ⑤それは、繰り返し求めるべきものである。

結論：聖霊によるバプテスマについて

1. 意味

- (1) キリストとの有機的な一体化
- (2) キリストのからだなる教会との有機的な一体化
- (3) 真に救われている者たちとの有機的な一体化

2. 回数（異言を伴う聖霊のバプテスマ）

- (1) 1 回
 - ①ペンテコステの日に教会が誕生した。
 - ②それ以降は、信じた瞬間にすべての人は自動的にその恵みに与る。
- (2) 3 回、あるいは、4 回
 - ①ユダヤ人の救い（2 章）
 - ②サマリヤ人の救い（8 章）
 - ③異邦人の救い（10 章）
 - ④バプテスマのヨハネの弟子たちの救い（19 章）
- (3) 今でも、信じた全ての人に起こる。
 - ①救いの体験とは別の「第 2 の恵み」の体験である。
 - ②この体験によって、聖化が促進される。
- (4) 正解は、(2) である。
 - ①ルカは、歴史上起こったことを記録している。
 - ②その出来事を、普遍的真理として適用してはならない。
 - ③3000 人の回心（2：41）の時には、そういう記録がない。
 - ④5000 人の回心（4：4）の時にも、そういう記録はない。
- (5) 注意点
 - ①聖霊の賜物としての異言は、今もある。

3. 目的（異言を伴う聖霊のバプテスマ）

(1) 神は、巡礼に来ていたユダヤ人たちの歓心を得ようとされた。

①当時のユダヤ人たちは、アラム語、ヘブル語、ギリシア語を話した。

②どこに住んでいるユダヤ人であっても、最低 2 つは話すことができた。

③つまり、12 使徒たちは異言を使わなくても、普段使っている言語で他のユダヤ人たちと対話することができたのである。

④異言は、巡礼者たちへの「しるし」となった。

⑤神が語っておられるのでそれに耳を傾けよというメッセージが、ここにある。

(2) 4 回の事例は、それぞれが、ある特定のグループの救いを証明する「しるし」となった。

(3) また、「聖霊によるバプテスマ」は、使徒の権威を証明する「しるし」となった。

①第 4 の事例（19 章）は、パウロの使徒職の証明である。

「巡礼者たちの反応」

使徒 2 : 5～13

1. はじめに

(ILL) 藤井聡太 6 段の大局観

(1) 前回の内容の確認

- ①When (いつ) : 五旬節の日
- ②Where (どこで) : 神殿域
- ③Who (誰が) : 12 使徒たち
- ④What (何を) : 他国の言葉で語った。

(2) アウトライン

- ①巡礼者たちの驚き (5～8 節)
- ②巡礼者たちの故郷 (9～11 節)
- ③巡礼者たちの反応 (12～13 節)

結論 :

- (1) ディアスポラ
- (2) ローマから来た人たち

聖霊降臨に対する巡礼者たちの反応について学ぶ

I. 巡礼者たちの驚き (5～8 節)

1. 5 節

Act 2:5 さて、エルサレムには、敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国から来て住んでいたが、

(1) 五旬節の祭りの期間、エルサレムは巡礼者たちでごった返していた。

- ①巡礼者たちは、イスラエル全土から、また、ディアスポラの地からエルサレムに上ってきていた。
- ②彼らは、ディアスポラと呼ばれる。

(2) 「敬虔なユダヤ人たち」

- ①イスラエルの慰められることを待ち望むユダヤ人
- ②死んでエルサレムに埋葬されることを願うユダヤ人

Luk 2:25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルの慰められることを待ち望んでいた。聖霊が彼の上にとどまっておられた。

③0JB は、「orthodox」と訳している。

(3) 「天下のあらゆる国から来て住んでいた」

- ①「住んでいた」は、「カトイケオウ」という動詞である。
- ②これは、「滞在していた」、「仮住まいをしていた」という意味である。
- ③当時の旅行は、高価で時間もかかった。
- ④過越の祭りから五旬節の祭りまでの 50 日間、エルサレムに滞在するユダヤ人が多くいた。
- ⑤1 年の間のこの 2 ヶ月間、エルサレムの人口はピークに達した。
- ⑥この時期に、イエスの十字架刑、復活、聖霊降臨、使徒たちの証言が起こったのは、偶然ではない。

2. 6 節

Act 2:6 この物音が起こると、大ぜいの人々が集まって来た。彼らは、それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、驚きあきれてしまった。

(1) 激しい風が吹いてくるような響きと、炎のような分かれた舌は、瞬時で終わった。

- ①それを目撃できたのは、恐らく 120 人の信者たちだけであろう。
- ②12 使徒たちは他国の言葉で語り始めた。

(2) 大ぜいの巡礼者たちが、激しい風が吹いてくるような響きを聞いて集まって来た。

①シャカイナグローリーは去っていたが、使徒たちが他国の言葉を語っていた。

「この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった」（新共同訳）

②彼らは、驚きあきれた。

3. 7～8 節

Act 2:7 彼らは驚き怪しんで言った。「どうでしょう。いま話しているこの人たちは、みなガリラヤの人ではありませんか。」

Act 2:8 それなのに、私たちめいめいの国の国語で話すのを聞くとは、いったいどうしたことでしょう。

(1) 使徒たちがガリラヤ人であることは、すぐに分かった。

①他国の言葉で話していても、ガリラヤ訛りがある。

Mat 26:73 しばらくすると、そのあたりに立っている人々がペテロに近寄って来て、「確かに、あなたもあの仲間だ。ことばのなまりではっきりわかる」と言った。

・喉音が特徴である。

②ガリラヤ人は、田舎者として見下されていた。

(2) その田舎者たちが、なぜこれほど多くの外国語を流暢に話することができるのか。

①それらの外国語は、巡礼者たちの出身地の方言であった。

(3) 使徒たちが話している内容は何か。

①ここでの「ことば」は、「グロッサ」ではなく「ディアレクトス」である。

*方言である。

②使徒たちは、方言で神を賛美していたのである。

*これは、福音（悔い改めのメッセージ）ではない。

*これは、巡礼者たちの関心を引くための「しるし」であった。

③ペテロのメッセージは、共通言語のアラム語で語られたと思われる。

II. 巡礼者たちの故郷（9～11 節）

1. 9 節 a

Act 2:9a 私たちは、パルテヤ人、メジヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、

(1) 東方の人々である。

①アッシリヤ捕囚とバビロン捕囚によるディアスポラ

②彼らは、アラム語を話していた。

③バビロンには大きなユダヤ人共同体とラビ養成学校があった。

2. 9 節 b

Act 2:9b ユダヤ、

(1) 「ユダヤ」というのは、ローマの行政区を意識した言葉である。

①これは、シリヤも含んだ地域である。

②その言語は、やはりアラム語である。

3. 9 節 c～10 節 a

Act 2:9c カパドキヤ、ポントとアジア、

Act 2:10a フルギヤとパンフリヤ、

(1) これらは、小アジア（今のトルコ）の国々である。

①その言語は、ギリシア語である。

4. 10 節 b

Act 2:10b エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者たち、

(1) これらは、北アフリカの国々である。

①その言語はやはりギリシア語である。

5. 10 節 c～11 節 a

Act 2:10c また滞在中のローマ人たちで、

Act 2:11a ユダヤ人もいれば改宗者もいる。

(1) 「滞在中のローマ人たち」の言語はラテン語である。

①ここでの節の区分は、不幸である。

②ローマ人たちの中には、ユダヤ人もいれば改宗者もいる。

6. 11 節 b

Act 2:11b またクレテ人とアラビヤ人なのに、あの人たちが、私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは」

(1) クレテ人の言語はギリシア語で、アラビヤ人の言語はアラビヤ語である。

①どの国や地方にも方言がある。

②巡礼者たちは、自分たちのお国言葉で使徒たちが神を賛美しているのを聞いた。

Ⅲ. 巡礼者たちの評価（12～13 節）

1. 12 節

Act 2:12 人々はみな、驚き感って、互いに「いったいこれはどうしたことか」と言った。

(1) ある人たちは、「いったいこれはどうしたことか」と問いかけた。

①彼らは、奇跡が起きていることを認め、その意味を追求した。

2. 13 節

Act 2:13 しかし、ほかに「彼らは甘いぶどう酒に酔っているのだ」と言ってあざける者たちもいた。

(1) しかし、「彼らは甘いぶどう酒に酔っているのだ」とあざ笑う者たちもいた。

①「甘いぶどう酒」とは、発酵途中の若いぶどう酒である。

②当時のユダヤ文化では、酩酊は非難の対象となった。

＊特に、午前9時の酩酊は問題である（ささげ物の時間）

＊また、神殿での酩酊も問題である。

結論：神の大局観

1. ディアスポラ

- (1) ヘブライ語でガルート（追放）。
- (2) ギリシア語でディアスポラ（散らされている者）。
- (3) 起源は、アッシリヤ捕囚（前 722 年）とバビロン捕囚にある（前 586 年）。
*捕囚の地から帰還したのは、一部のユダヤ人たちであった。
- (4) ローマ時代には、商機を求めて自発的に移住したユダヤ人たちもいた。
- (5) 古代最大のユダヤ人の共同たちは、アレクサンドリアにあった。
*前 1 世紀のアレクサンドリアでは、人口の約 40%がユダヤ系であった。
- (6) 紀元 1 世紀のディアスポラ人口は、約 500 万人。
*その 5 分の 4 は、ローマ帝国内に住んでいた。
- (7) 紀元 70 年以降、状況が変わった。
*ユダヤ人たちは、オリエント、ローマ世界の大都会で土着化し始めた。
*しかし、異邦人の文化と同化することはなかった。
*そのことが、反ユダヤ主義が拡散する一因となった。
- (8) ディアスポラの存在は、福音伝達のための有効な手段となった。
*エルサレムでの出来事が、短時間の内にローマ世界に伝わった。
- (9) パウロの伝道は、ディアスポラの地のシナゴグと深い関係にあった。

2. ローマから来た巡礼者たち

「また滞在中のローマ人たちで、ユダヤ人もいれば改宗者もいる」（2：10c～11a）

- (1) ここでの節の区分は、聖書を学ぶ者にとっては不幸である。
- (2) ルカは、ローマからの巡礼者に関してのみ、情報を追加している。
①ユダヤ人と改宗者がいた。
- (3) 改宗者とは、異邦人でユダヤ教に改宗した者である。
①彼らは、定義的にはユダヤ人と見なされる。
- (4) 使徒の働き最後の最後は、ローマで終わる（約 30 年後）。
①ルカは、そのゴールを予測していたはずである。
- (5) ローマにある教会は、パウロが開拓したのではない。
①五旬節の日に救われた人たちが、ローマに戻って設立したと考えられる。
- (6) ここにも、神の大局観が表われているではないか。

「ペテロのメッセージ（1）」

使徒 2：14～21

1. はじめに

(1) 前回の内容の確認

- ①巡礼者たちの驚き（5～8 節）
- ②巡礼者たちの故郷（9～11 節）
- ③巡礼者たちの反応（12～13 節）

(2) ここからペテロのメッセージが始まる（14～40 節）。

- ①ペテロのメッセージのテーマは一つである。「イエスは主でありメシアである」

＊使 2：36

Act 2:36 ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

- ②ペテロは、ユダヤ人のために天の御国の扉を開こうとしている。

＊マタ 16：19

Mat 16:19 わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」

(3) ペテロのメッセージのアウトライン

- ①この出来事は、預言の成就である（15～21 節）。
- ②イエスは、メシアである（22～32 節）。
- ③昇天したメシアであるイエスは、聖霊を注がれた（33～36 節）。
- ④適用（37～40 節）

(4) アウトライン

- ①この出来事は、預言の成就である（15～21 節）。

＊あざける者たちへの反論（14～15 節）

＊あざける者たちへの説明（16～21 節）

結論：

- (1) 新約聖書における旧約聖書の引用法
- (2) 変えられた弟子たち

ペテロのメッセージのポイントⅠについて学ぶ。

I. この出来事は、預言の成就である（15～21 節）

1. あざける者たちへの反論（14～15 節）

（1）14 節

Act 2:14 そこで、ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々にはっきりとこう言った。「ユダヤの人々、ならびにエルサレムに住むすべての人々。あなたがたに知っていただきたいことがあります。どうか、私のことばに耳を貸してください。

①ペテロは、12 使徒のスポークスマンとして語っている。

＊12 使徒がともに立っている。

＊その中には、マッテヤも含まれている。

＊主を 3 度も拒んだ臆病なペテロではなく、勇敢なペテロが語っている。

②聴衆は、ユダヤ人である。

＊「ユダヤの人々」とは、ユダヤに住む人々である。

＊「エルサレムに住むすべての人々」とは、ディアスポラの地からの巡礼者。

③「どうか、私のことばに耳を貸してください」

＊人々は、異言についての説明を聞いたがっている。

＊ペテロはこの呼びかけによって、聴衆の心を掴むことができた。

（2）15 節

Act 2:15 今は朝の九時ですから、あなたがたの思っているようにこの人たちは酔っているのではありません。

①「この人たち」とは、12 使徒のことである。

②「この人たち」が酔っている可能性は、全くない。

③当時のユダヤ人の習慣では、ぶどう酒を飲むのは夕刻である。

④朝の 9 時は、日に 3 度ある祈りと犠牲を捧げる時間の最初である。

⑤祭りの期間、信仰熱心なユダヤ人たちは午前 10 時までは飲食を控えた。

II. あざける者たちへの説明（16～21 節）

1. ヨエルの預言の成就（16 節）

Act 2:16 これは、預言者ヨエルによって語られた事です。

（1）「これ」とは、12 使徒が異言を話している（酔ったようになっている）こと。

①この出来事は、ヨエルの預言の成就という視点から解釈する必要がある。

②ペテロは、ヨエ 2：28～32 を引用する。

③ヘブル語聖書では、ヨエ3:1～5である。

＊(新共同訳)は、ヘブル語聖書と同じ区分を採用している。

(2) ペテロは、適用のために若干の変更を加えながら引用している。

①「その後」(ヨエル書)という言葉が、「**終わりの日**」に変更されている。

②ペテロは、終末論的ニュアンスを聴衆に伝えようとしている。

③預言書では、「**終わりの日**」という言葉は、「**【主】の日**」(大患難時代)とそれに続く状況を連想させるものである。

＊イザ2:2、ミカ4:1

④ペテロは、今は「**終わりの日**」であるという認識を持った。

＊ヘブ1:2

Heb 1:2 この**終わりの時**には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。

＊御子の到来とともに「**終わりの時**」が始まった。

⑤ユダヤ教のラビたちは、メシア時代のことを「**終わりの時**」と表現していた。

⑥初代教会において、ペテロとヘブル書の著者は、同じ認識を共有していた。

2. ヨエルの預言の3区分(17～21節)

(1) 聖霊の傾注(17～18節)

Act 2:17 『神は言われる。**／終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。／すると、あなたがたの息子や娘は預言し、／青年は幻を見、／老人は夢を見る。**

Act 2:18 その日、わたしのしもべにも、はしためにも、**／わたしの霊を注ぐ。／すると、彼らは預言する。**

①聖霊が、「**すべての人**」に注がれる。

②その結果、身分や地位に関係なしに、老若男女が超自然的な賜物を発揮する。

③この段階でのペテロの理解では、「**すべての人**」の中に異邦人は含まれていない。

(2) 天変地異(19～20節)

Act 2:19 また、わたしは、**上は天に不思議なわざを示し、／下は地にしるしを示す。／それは、血と火と立ち上る煙である。**

Act 2:20 主の大いなる**輝かしい日**が来る前に、**／太陽はやみとなり、月は血に変わる。**

①聖霊の傾注に続いて、天変地異が起こる。

②太陽はやみとなり、月は血に変わる。

③これは、大患難時代における出来事の描写である。

④メシアの再臨とメシア的王国設立の前に、このような出来事が起こる。

(3) 救いの約束 (21 節)

Act 2:21 しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。』

①ヨエ 2 : 32

Joe 2:32 しかし、【主】の名を呼ぶ者はみな救われる。／【主】が仰せられたように、／シオンの山、エルサレムに、／のがれる者があるからだ。／その生き残った者のうちに、／【主】が呼ばれる者がいる。

②ヨエル書では、【主】とは「ヤハウエ」（ヘブル語）である。

③使徒の働きでは、主とは「キュリオス」（ギリシア語）である。

④イエス・キリストは、旧約聖書のヤハウエである。

＊ペテロは、これ以降イエスを「キリスト」（メシア）と呼び、「キュリオス」（ヤハウエ）と呼ぶ。

⑤「主の名を呼ぶ者は、みな救われる」

＊イエスをヤハウエと信じ信頼する者は、みな救われる。

＊これが、ペテロのメッセージの中心である。

⑥次回、メッセージのポイントⅡで、イエスはメシアであることが証明される。

3. ひとつの疑問：ペテロによるヨエル書の引用法に問題はないか。

(1) ヨエルが預言したことは、この五旬節の日に、すべてが成就したわけではない。

①これは、主観的で自分勝手な引用法ではないか。

結論：

1. 新約聖書における旧約聖書の引用法

(1) 預言がそのまま成就した場合

①マタ 1 : 22～23（イザ 7 : 14 の引用）

「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。『見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる』（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である）

②マタ 2 : 5～6（ミカ 5 : 2 の引用）

「彼らは王に言った。『ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。『ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから』」

(2) 歴史的イベントを取り上げ、それを「型（タイプ）」として説明する場合

①マタ 2 : 15b（ホセ 11 : 1 の引用）

「これは、主が預言者を通して、『わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した』と言われた事が成就するためであった」

②ホセ 11 : 1 は、預言ですらない。

③出エジプトの出来事によって表現されたイスラエルへの神の愛を示している。

④「型（タイプ）」があるなら、「本体（オリジナル）」もある。

⑤「本体（オリジナル）」は、御子イエスの救出である。

⑥「エジプト」とは「ヘロデの脅威」のこと。

(3) 実際の歴史的事件を取り上げ、それを適用する場合（類似点が一つあれば OK）

①マタ 2 : 17～18（エレ 31 : 15 の引用）

「そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。『ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ』」

②エレ 31 : 15 もまた、預言ではない。

③ユダヤ人の息子たちが、バビロンに連行されようとしている。

④ラマ（エルサレムの北）は、最初の集合地点。そこからバビロンに向かう。

⑤母親たちがラマで嘆いている。

*ラケルは、イスラエルの母の象徴

⑥ベツレヘムの母親たちは、自分の息子を失い、嘆き悲しんでいる。

*相違点は多い。ラマとベツレヘム、捕囚と殺害。

*息子を失ったという意味では、同じ。

(4) メシア預言を要約する場合

①マタ 2 : 23b

「これは預言者たちを通して『この方はナザレ人と呼ばれる』と言われた事が成就するためであった」

②マタ 2 : 23 は、「預言者たち」の預言である。

③「この方はナザレ人と呼ばれる」という預言は旧約聖書にはない。

④預言者が複数形である。

⑤ナザレ人の意味が重要である。

*その背後にあるのは、イザ 52～53 章のイメージである。

(5) 新約聖書の旧約聖書引用法を根拠にして、比喩的解釈を行ってはならない。

①以上の 4 つの引用法は、ユダヤ教のラビたちが行っていたものである。

*ペテロのヨエル書からの引用法は、上記（3）に分類される。

*類似点が一つある。「聖霊の傾注」がそれである。

*これは、預言の二重成就ではない。

②新約聖書の記者たちは、聖霊によって導かれて執筆した（靈感）。

*つまり、神がその引用法を認定されたのである。

*私たちが主観的にそのような解釈をしてはならないのである。

2. 変えられた弟子たち

(1) ペテロを初めとする使徒たちの変化

①イエスを3度裏切った臆病な弟子が、勇猛な獅子のように声を張り上げている。

(2) ペテロのメッセージの特徴

①聖霊の力によって語った。

②ゴールは、「しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる」ということである。

「ペテロのメッセージ（2）」

使徒 2：22～32

1. はじめに

(1) ペテロの第 1 回目のメッセージを学んでいる。

- ①このメッセージは、使徒の働きの土台となるものである。
- ②このメッセージは、それ以降のメッセージの枠組を規定するものである。
- ③このメッセージのゴールは、「イエスは主でありメシアである」というもの。

(2) ペテロのメッセージのアウトライン

- ①この出来事は、預言の成就である（15～21 節）。
- ②イエスは、メシアである（22～32 節）。
- ③昇天したメシアであるイエスは、聖霊を注がれた（33～36 節）。
- ④適用（37～40 節）

(3) 前回のメッセージの内容

- ①この出来事は、ヨエルの預言の成就である。
- ②今はすでに「終わりの日」に入っている。
- ③「しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる」（21 節）
- ④では、主とは誰か。それが今回のメッセージの内容である。

(4) 今回のアウトライン

- ②イエスは、メシアである（22～32 節）。
 - *御業による証明（22～23 節）
 - *復活による証明（24～32 節）

結論：

- (1) イエスを十字架に付けた責任は、だれにあるか。

ペテロのメッセージのポイントⅡ、「イエスは、メシアである」について学ぶ。

I. 御業による証明（22 節）

1. 22 節

Act 2:22 イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行われました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身をご承知のことです。

(1) ペテロがいう「主」とは、イエスのことである。

①ナザレ人イエスの噂は、国中に響いていた。

＊ペテロは、「これは、あなたがた自身をご承知のことです」と言っている。

②その内容は、イエスの公生涯そのものである。

(2) イエスは、彼らの間で奇跡を行われた。

①「力あるわざと不思議としるし」

②これによって、神はイエスがキリスト(メシア、油注がれた者)であることをユダヤ人に対してあかしされた。

1Co 1:22 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。

(4)ペテロの言葉を聞いた聴衆は、イエスとモーセの関連性を思い出したはずである。

①申 34:10~12

Deu 34:10 モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼を【主】は、顔と顔とを合わせて選び出された。

Deu 34:11 それは【主】が彼をエジプトの地に遣わし、パロとそのすべての家臣たち、およびその全土に対して、あらゆるしるしと不思議を行わせるためであり、

Deu 34:12 また、モーセが、イスラエルのすべての人々の目の前で、力強い権威と、恐るべき威力とをことごとくふるうためであった。

②使 3:22~23 (2回目のメッセージ) では、その関連性がさらに明らかになる。

2. 23 節

Act 2:23 あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。

(1) イエスの十字架の死

①それは、神の計画と予知によるものである。

＊イエスの死は、神の計画が成就するために不可欠な要素である。

＊イエスの死は、神が計画したことである。

②人間にも責任がある。

＊ユダヤ人たちは、イエスをローマ人に渡した。

・指導者の罪は、民全体の罪である。

＊さらに、十字架刑を執行したローマ人たちにも責任がある。

・「不法な者」とは、「律法を持たない者」という意味である。

(2) ペテロは、このテーマをそれ以上展開しないで、話題をイエスの復活に移す。

Ⅱ．復活による証明（23～31 節）

1. 24 節

Act 2:24 しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。

(1) イエスの苦しみは、神の力によって取り去られた。

①この方は、死者の中から復活された。

②神があかしされたキリストが、死につながれていることなど、あり得ない。

2. 25～28 節

Act 2:25 ダビデはこの方について、こう言っています。／『私はいつも、自分の目の前に主を見ていた。／主は、私が動かされないように、／私の右におられるからである。

Act 2:26 それゆえ、私の心は楽しみ、／私の舌は大いに喜んだ。／さらに私の肉体も望みの中に安らう。

Act 2:27 あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、／あなたの聖者が朽ち果てるのを／お許しにならないからである。

Act 2:28 あなたは、私にいのちの道を知らせ、／御顔を示して、私を喜びで満たしてください。』

(1) ペテロは、再び旧約聖書を引用する。

①詩 16：8～11 の引用

②これは、メシア的詩篇（メシア預言）である。

③約 1000 年前にダビデが作った。

*苦難の日に作られたものであろう。

④最後の部分でダビデは、神が自分の肉と魂を支えてくださると告白している。

(2) ダビデはこの詩篇を第一人称（私）で書いている。

①最後の部分は、ダビデ自身のことを預言したものではない。

②ダビデは、いわばメシアの代理人として第一人称で語っているのである。

③これは、預言がそのまま成就したという引用法である。

*前回学んだ 4 つの引用法の第 1 番目のものである。

3. 29 節

Act 2:29 兄弟たち。父祖ダビデについては、私はあなたがたに、確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日まで私たちのところにあります。

(1) ダビデは、死んで葬られた。

1Ki 2:10 こうして、ダビデは彼の先祖たちとともに眠り、ダビデの町に葬られた。

①ダビデの町とは、エルサレムの南東の地域を指す。

(2) 「その墓は今日まで私たちのところにあります」

①その墓がどこにあったかは、現時点では特定されていない。

②「ダビデの墓」として知られている場所は、元の墓から 2 キロ前後離れている。

③ダビデは墓に葬られているので、「私」というのは、ダビデ自身のことではない。

4. 30～31 節

Act 2:30 彼は預言者でしたから、神が彼の子孫のひとりを彼の王位に着かせると誓って言われたことを知っていたのです。

Act 2:31 それで後のことを予見して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない』と語ったのです。

(1) ダビデは預言者として、預言したのである。

①彼は、ダビデ契約を理解し、その成就を信じていた。

(2) ダビデ契約の内容

2Sa 7:12 あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。

2Sa 7:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。

①「ダビデの子孫のひとり」が、永遠の王座に着く。

②そのためには、その者は朽ちる体ではなく、復活の体を持つ必要がある。

(3) ダビデは、ダビデ契約に基づいて「ダビデの子」の復活を預言した。

①「彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない」

②「ハデス」とは、死者の魂が留まる場所である。

5. 32 節

Act 2:32 神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。

(1) 使徒たちは全員、イエスの復活の目撃者である。

Act 1:22 すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちが離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。」

①イエスの復活を証言するために、彼らは命を賭ける。

結論：イエスを十字架につけた責任は、だれにあるか。

Act 2:23 あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。

1. それは、神の計画と予知によるものである。

- (1) イエスの死は、神の計画が成就するために不可欠な要素である。
- (2) イエスの死は、神が計画したことである。
- (3) ペテロは、この神学的確信を持っていた。

1Pe 1:2 父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上にありますように豊かにされますように。

1Pe 1:20 キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現れてくださいました。

2. しかし、イエスをローマ人渡したユダヤ人にも責任はある。

(1) ペテロは、ユダヤ人の罪を責めた。

①使2:36、3:15、4:10、5:30、10:39

(2) ステパノもユダヤ人の罪を責めた。

Act 7:52 あなたがたの父祖たちが迫害しなかった預言者がだれかあったのでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人たちを殺したが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。

(3) パウロもユダヤ人の罪を責めた。

Act 13:28 そして、死罪に当たる何の理由も見いだせなかったのに、イエスを殺すことをピラトに強要したのです。

(4) 一連の叱責は、旧約聖書の預言者たちのメッセージと似ている。

①罪を指摘するのは、民を悔い改めに導き、救いを得させるためである。

(5) この罪の指摘は、メシアを拒否したユダヤ人の世代に向けられたものである。

(6) 一連の聖句を基に、ユダヤ人を「キリスト殺し」と呼ぶのは間違っている。

(7) 教会史の中に見られる反ユダヤ主義は、大きな罪である。

3. さらに、十字架刑を執行したローマ人たちにも責任がある。

(1) 「不法な者」とは、「律法を持たない者」という意味である。

4. 究極的には、人類全体に責任がある。

「ペテロのメッセージ（3）」

使徒2：33～40

1. はじめに

(1) ペテロの第1回目のメッセージを学んでいる。

- ①このメッセージは、使徒の働き of 土台となるものである。
- ②このメッセージは、それ以降のメッセージの枠組を規定するものである。
- ③このメッセージのゴールは、「イエスは主でありメシアである」というもの。

(2) ペテロのメッセージのアウトライン

- ①この出来事は、預言の成就である（15～21節）。
- ②イエスは、メシアである（22～32節）。
- ③昇天したメシアであるイエスは、聖霊を注がれた（33～36節）。
- ④適用（37～40節）

(3) 前回のメッセージの内容

- ②イエスは、メシアである（22～32節）。
 - *御業による証明（22～23節）
 - *復活による証明（24～32節）

(4) 今回のアウトライン

- ③昇天したメシアであるイエスは、聖霊を注がれた（33～36節）。
- ④適用（37～40節）

結論：

- (1) 当時の人々が期待していたメシア像とは何か。
- (2) 洗礼は救いの条件か。

ペテロのメッセージのポイントⅢとⅣについて学ぶ。

I. 昇天したメシアであるイエスは、聖霊を注がれた（33～36節）。

1. 33節

Act 2:33 ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。

(1) イエスは、神の右に上げられた。

- ①「神の右」とは、権威ある座であることを当時のユダヤ人たちは理解していた。

②イエス自身が、この言葉をご自分に適用された。

Mar 14:61 しかし、イエスは黙ったままで、何もお答えにならなかった。大祭司は、さらにイエスに尋ねて言った。「あなたは、ほむべき方の子、キリストですか。」

Mar 14:62 そこでイエスは言われた。「わたしは、それです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずです。」

＊マタ 26：64 も参照

③ステパノのメッセージにも、この言葉が出て来る。

Act 7:55 しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、

Act 7:56 こう言った。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」

④パウロの教えの中にも、この言葉が出て来る。

Rom 8:34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

⑤ヘブル人への手紙の中にも、この言葉が出て来る。

Heb 10:12 しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、

Heb 10:13 それから、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。

⑥ペテロは書簡の中でもこの言葉を用いている。

1Pe 3:22 キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの権威と権力を従えて、神の右の座におられます。

(2) 昇天したイエスは、聖霊を注いでくださった。

①これは、御父から約束された聖霊である。

②聖霊が下った証拠を、今人々は目撃している。

＊使徒たちが異言で語っている。

2. 34～35 節

Act 2:34 ダビデは天に上ったわけではありません。彼は自分でこう言っています。／『主は私の主に言われた。

Act 2:35 わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまではわたしの右の座に着いていなさい。』

(1) ペテロは、詩 110：1 を引用する。

①新約聖書で最も多く引用されているメシア的預言である。

*マ 22 : 42～45、マコ 12 : 36、ルカ 20 : 42～43

*1 コリ 15 : 25、エペ 1 : 22、ヘブ 1 : 13

- ②ユダヤ教の伝統の中では、詩 110 はメシア的詩篇として解釈されてきた。
- ③ペテロは、その伝統に立って、この詩篇を引用している。
- ④ペテロの論点は、詩 110 : 1 はイエスの昇天によって成就したということ。

(2) 旧約聖書で詩 110 : 1 を確認する。

Psa 110:1 **【主】**は、私の主に仰せられる。／「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、／わたしの右の座に着いていよ。」

①「私」は、作者のダビデである。

②「**【主】**」は、ヤハウェである。

* **【主】**は、アブラハム、イサク、ヤコブと契約を結ばれた神の御名である。

③「私の主」は、アドナイである。

*ダビデはこの方を、「私の主」と呼んでいる。

*「私の主」とは、ナザレのイエスのことである。

*ダビデが「私の主」と呼んだ方は、父なる神の右の座に着かれた。

(3) 詩 110 : 1 は、パリサイ人たちにとって不可解な聖句であった。

Mat 22:42 「あなたがたは、キリストについて、どう思いますか。彼はだれの子ですか。」彼らはイエスに言った。「ダビデの子です。」

Mat 22:43 イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは、御霊によって、彼を主と呼び、

Mat 22:44 『主は私の主に言われた。／「わたしがあなたの敵を／あなたの足の下に従わせるまでは、／わたしの右の座に着いていなさい。』／と言っているのですか。

Mat 22:45 ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうして彼はダビデの子なのでしょう。」

Mat 22:46 それで、だれもイエスに一言も答えることができなかった。また、その日以来、もはやだれも、イエスにあえて質問をする者はなかった。

3. 36 節

Act 2:36 ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

(1) パリサイ人たちが答えられなかった質問に、ペテロが答えている。

①ダビデが「私の主」と呼んだ方は、ナザレのイエスである。

- ②イエスは、復活と昇天によって、「主ともキリストともされた」。
 - *イエスが「主でありキリスト」であることが明らかになった。
 - *ナザレ人イエスの真の姿が啓示された。
- ③「イスラエルの全家」（新改訳2017）は、はっきりと知るべきである。
 - *このイエスを、あなたがたは十字架に付けた。

II. 適用（37～40節）

1. 37節

Act 2:37 人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか」と言った。

- (1) ペテロが勧めの言葉を語る前に、人々は応答した。
 - ①ペテロのメッセージには、聖霊による説得力があった。
 - ②そのメッセージによって、人々に認罪が与えられた。
 - ③彼らは、心を刺されるような痛みを覚えた。
 - ④御子を十字架に付けた罪を、どうしたら赦していただけるのかと問うた。

2. 38～39節

Act 2:38 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。

Act 2:39 なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くに
いる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」

(1) 「悔い改めなさい」

- ①ギリシア語で「メタノエオウ」である。
- ②完全な方向転換を意味する。
 - *イエスに関する理解を完全に変えることを意味する。
 - *イエスは主でありキリストであることを確信する。
- ③洗礼は救いの条件ではない。
 - *救いは、恵みにより、信仰による。

(2) 救いの約束は、神が召した人々に与えられている。

- ①「あなたがたと、その子どもたち」とは、ユダヤ人である。
- ②「遠くにいる人々」とは、異邦人である。

(3) 救いには両面がある。

- ① 神的側面は、神の召しである。
- ② 人間的側面は、悔い改めである。

3. 40 節

Act 2:40 ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、「この曲がった時代から救われなさい」と言って彼らに勧めた。

(1) ペテロのメッセージの続きは、この節に要約されている。

- ① 彼は、多くのことばをもって、証しをした。

(2) 訳文の比較

「この曲がった時代から救われなさい」(新改訳)

「邪悪なこの時代から救われなさい」(新共同訳)

「この曲れる代(よ)より救ひ出(いだ)されよ」(文語訳)

「この曲がった世代から救われなさい」(回復訳)

「Save yourselves from this crooked generation.」(ASV)

- ① 悔い改めることは、イエスを拒否した世代との決別を意味する。
- ② 悔い改めることは、イエスとイエスを信じる人々との一体化を意味する。

結論：

1. 当時の人々が期待していたメシア像とは何か。

Act 2:36 ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

(1) 「キリスト」とは、ヘブル語のメシアである。

- ① 聖なる務めのために油注ぎを受けた者
- ② 預言者、祭司、王
- ③ ユダヤ人たちは、やがてメシアが来られるという期待を持っていた。

(2) 紀元1世紀におけるメシア待望の内容は、複雑である。

① ダビデ王の再来というイメージ

* イスラエルをローマの圧政から解放する勝利の王

② 究極的な祭司的リーダーというイメージ

* 民の身代わりとして死ぬお方

③2人のメシアというイメージ

*ひとりは、死ぬ運命にある。

*もうひとりは、勝利する運命にある。

④神秘的な超人というイメージ

*神に匹敵するような地位に上げられる。

⑤いかなるメシア像も期待しない人々

(3) ペテロは、当時存在していたどのメシア像とも異なるメシア像を提示した。

①その特徴は、十字架、埋葬、復活、昇天、そして、聖霊降臨である。

②どのメシア像よりもはるかに壮観なメシアである。

2. 洗礼は救いの条件か。

Act 2:38 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」

(1) 洗礼は、救いの条件ではない。

①救いは常に、恵みにより、信仰による。

②聖書には、洗礼が救いの条件だと教えている箇所はない。

③もし洗礼が救いの条件であるなら、それは業による救いになる。

(2) (新改訳 2017)

Act 2:38 そこで、ペテロは彼らに言った。「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」

①訳語の問題がある。

②「エイス」という前置詞。「〇〇のために」

*「〇〇のゆえに」「〇〇だから」とも訳せる。

③「罪が赦されたのだから、バプテスマを受けなさい」という訳が正しい。

(3) 悔い改め、バプテスマ、賜物としての聖霊という順番が書かれている。

①今は、悔い改めた瞬間に賜物としての聖霊を受ける。

②ペテロの聴衆は、イエスを拒否した世代に属するユダヤ人たちであった。

③彼らにとってバプテスマは、その世代からの分離を公に宣言することであった。

④それゆえ、ここにある順番は、普遍的に適用されるものではない。